

『蟹工船』における労働者の連帯

— 松阪の「戦旗」防衛関西巡回講演会に触れながら —

尾西 康充

一年間の世相を反映した言葉が選ばれる（「ユーキャン新語・

流行語大賞」（現代用語の基礎知識）のトップテンに、二〇〇八年は「蟹工船」が入賞した。同賞の選評には「オホーツク海上の蟹工船で酷使される貧しい労働者達の群像劇が、格差・ワーキングプア等の現代日本の社会問題と重なり、発表から約八〇年後の今年ブームとなった」とある。「厳しい雇用失業情勢、働き方の多様化等に対応」するためという理由によつて労働者派遣法が原則自由化されて以来、派遣労働者を含む非正規雇用の労働者が激増し、「蟹工船」が発表された昭和初期と見紛うかのような劣悪な労働環境が現代の日本社会に出現した。

「蟹工船」（戦旗）、一九二九年五月、六月）は、漁業労働調査所函館支所の乗富道夫が北洋漁業の調査をおこなっているのを知った多喜二が、乗富とは小樽高商の同期生で校内の演劇研究会の仲間であつた誼から協力を求め、停泊中の蟹工船の实地調

査をしたり、漁夫たちとも直接会い、漁業労働組合の人たちからも具体的な知識をえた」といわれている（上）。

浅川監督は漁夫たちに「いやしくも仕事が国家的である以上、戦争と同じなんだ。死ぬ覚悟で働け！ 馬鹿野郎」と怒鳴り、たとえ病氣や脚氣をわずらつても休む暇が一切与えられない。帝国日本の名譽ある兵士であるという意識を注入された漁夫や雑夫たちは、過酷な労働に耐え忍ぶことが要求され、一段と生命の危険にさらされるようになる。「何んだか、理窟は分らねども、殺されたくねえ」と疑念と反感を強め、脚氣で死んだ二七歳の漁夫山田の水葬が終わると、漁から帰ってきた漁夫たちは「自分が——屍体になつた自分の身体が、底の暗いカムサツカの海に」麻袋に包まれて投げ込まれる光景を目に浮かべて「ゾツと」させられる。浅川監督のあまりに非情な仕打ちに「ものも云えず、そのままゾロゾロタラップを下りて行つた」が、「分つた、分つた」口の中でブツ／＼云いながら、塩ぬれのド

ツたりした袷天を脱いだ後、ついにサボタージュをはじめめる決意を固める。

表には何も出さない。気付かれないように手をゆるめて行く。監督がどんなに思いッ切り怒鳴り散らしても、タ、キつけて歩いてても、口答えもせず「おとなしく」している。それを一日置きに繰り返かえず。(初めは、おっかなびつくり、おっかなびつくりでしていたが。)——そういうようにして、「サボ」を続けた。水葬のことがあつてから、モットその足並が揃ってきた。

仕事の高は眼の前で減つて行つた。

(八)

「サボ」は慎重にはじめられた。漁夫や雑夫たちは「表には何も出さない」ようにして、たとえ監督が「どんなに思いッ切り怒鳴り散らしても、タタキつけて歩いてても、口答えもせず『おとなしく』している。水葬の一件を通じて、それまで募らせていた不満が堰を切つたようにあふれ出し、やがて自分もまた麻袋に包まれた屍体になるのだと身にしみて感じさせられるようになる」と「モットその足並が揃ってきた」という。

本来、「中年過ぎた漁夫」は「一番」過酷な労働が「身にこたえる」はずなのに、サボタージュには「イヤな顔」を見せていた。だが意外にも浅川監督や雑夫長による報復はおこなわれず、

サボタージュが効果を示してくると、「中年過ぎた漁夫」も「若い漁夫達の云うように」動くようになった。その一方、協力を得るのが難しかったのは川崎船の船頭たちであった。

困つたのは、川崎の船頭だった。彼等は川崎のことでは全責任があり、監督と平漁夫の間に居り、「漁獲高」のことでは、すぐ監督に当つて来られた。それで何よりつらかつた。結局三分の一だけ「仕方なしに」漁夫の味方をして、後の三分の二は監督の小さい「出店」——その小さい「〇」だった。

「それア疲れるさ。工場のようにキチン、キチンと仕事が進まってるわけには行かないんだ。相手は生き物だ。蟹が人間様に都合よく、時間々々に出てきては呉れないしな。仕方がないんだ」——そつくり監督の蓄音機だった。

(八)

川崎船とは発動機付小型漁船のことで、蟹工船には八隻が積み込まれていた。『函館市史』によれば、川崎船は一般的に「四枚はぎ型、長さ一三メートル、一〇トン、一五〜二〇馬力、電気着火式石油機関」仕様で建造されていた(2)。発表時には省略された「蟹工船」ノート稿の冒頭には、雇入れの相場が川崎船の船頭五、六十円、漁夫四十円、雑夫三十円とされ、「労働者虐待の『模範工場』であるかのように世間では取りざたされ

ているものの「実際は案外良い」待遇を受けていたと記されている。臨時に雇用される蟹工船の労働者のなかでも船頭は高い手当が支給されていたことが分かる一方、「実際は案外良い」とされているのは、船内で可能ながぎり労働が搾取されている作品の世界とは若干異なるとらえ方といえる。だが「船員も漁夫もそれを何千匹の鱣のように、白い歯をむいてくる波にもぎ取られないように、縛りつけるために、自分らの命を『安々』と賭けなければならなかった」と描写されているように、母船から離れて洋上で蟹を捕獲する川崎船は、浅川監督にとつて労働者の生命よりも大切なものであった。川崎船に対して「全責任」を負わされた船頭は、「監督と平漁夫の間」に立たされ「漁獲高」

のことでは「すぐに監督に当って」こられたというとりわけつらい立場にいたのだが、「結局三分の一だけ『仕方なしに』漁夫の味方」をして、「後の三分の二は監督の小さい『出店』」になつたという。「出店」とは、浅川監督の手下となつて詭弁を弄しながら漁夫や雑夫たちに過酷な労働を強いることが譬えられて、この他にも船頭は「小さい』『〇』『監督の蓄音器』と揶揄されている。それらのいずれにも否定的なニュアンスが込められているのだが、「小さい』『〇』」ほどのような意味であるのかは厳密には分からない。木村義之・小出美河子編『隠語大辞典』（二〇〇〇年四月、皓星社）によれば、「〇」は「一般巡查」を指しているという。同書の説明は富田愛次郎編『隠語輯覧』（一九一五年、京都府警察部）を典拠とし、これが主に警察関係の隠語

であつたことを考えれば、多喜二も同じ用法で使つていた可能性があるといえよう。

二

「監督と平漁夫の間」に立たされ、心情的には「平漁夫」の反発を理解しながらも実際の行動は浅川監督の手下となつて振る舞つていた船頭は、これから決起しようとする労働者たちが最初に立ち向かう相手になつた。

こんなことがあつた。——糞壺で、寝る前に、何かの話が思いがけなく色々の方へ移つて行つた。その時ひよいと、船頭が威張つたことを云つてしまつた。それは別に威張つたことではないが、「平」漁夫にはムツときた。相手の平漁夫が、そして、少し酔つていた。

「何んだって？」いきなり怒鳴つた。「手前え、何んだ。あまり威張つたことを云わねえ方がえゝんだ。漁に出たとき、俺達四、五人でお前えを海の中さタ、キ落す位朝飯前だんだ。——それッ切りだべよ。カムサツカだど。お前えがどうやって死んだって、誰が分るツて！」

そうは云つたものはない。それをガラ／＼な大声でどなり立てゝしまつた。誰も何も云わない。今迄話していた外のこと、そこでブツつり切れてしまつた。

然し、こういうようなことは、調子よく跳ね上つた空三

気だけの言葉ではなかった。それは今迄「屈従」しか知らなかった漁夫を、全く思いがけずに背から、とてつもない力で突きめした。突きめされて、漁夫は初め戸惑いしたようにウロウロした。それが知られずにいた自分の力だ、ということを知らずに。

(八)

漁夫が寝起きする船室は、タバコの煙や人いきれで空気が濁って臭いので「糞壺」と譬えられている。船頭は川崎船を操舵する役割を浅川監督から与えられているが、その一方糞壺で起居をもにする労働者仲間であった。船頭の何気ない発言に対して、普段ならそれを聞き流していた漁夫も、今回ばかりは「ムツ」として激しく反抗した。「あまり威張ったことを云わねえ方がえゝんだで」、「漁に出たとき、俺達四、五人でお前を海の中さタ、キ落す位朝飯前だんだ」と、それまでは口にするのを恐れていた言葉さえ、一度発してしまえば「今まで『屈従』しか知らなかった漁夫を、全く思いがけずに背から、とてつもない力で突きめした」という。ここには言葉の持つ力、胸中の複雑な思いを言葉におき換えて表出することを通じて、自己のおかれた状況を把握するのと同時にこれから取るべき態度を明確にして、そのとき同じ思いを抱いている人びとが集まるきっかけを与えることになる。踏みじられた人間に立ち上がる勇氣を与える言葉の力を考えれば、治安当局がなぜそれほどまで

に、多喜二の文学が一般大衆に読まれることを恐れていたのか分かる。

この後、漁夫の言葉は「今度は不思議な魅力になって、反抗的な気持が皆の心に喰い込んで行つた」とされ、「一旦この気持をつかむと、不意に、懐中電燈を差しつけられたように、自分の蛆虫そのまゝの生活がアリウと見えってきた」と描写される。そして「威張んな、この野郎」という言葉が伝わって漁夫や雑夫たちの反抗心が目覚めると、「殺されたくないものは来れ」という「学生上りの得意の宣伝語」によって彼らの気持が一つに結びつけられ、船内のどこで起きた事件でも「電気より早く、ぬかりなく『全体の問題』にすることが出来る。」ようになった。しかしその一方で、権力によって普段から馴致されている漁夫たちには封建的な主従関係を絶対視する習慣があり、それが（労働争議のような）「恐ろしいことなんか『日本人』に出来るか」という態度につながっており、彼らを束縛する弊習を払拭するのは決して容易なことではない。

その頃ちやうど「一週間程前の大嵐で、発動機船がスクリュウを毀」し、その修繕のために「雑夫長が下船して、四、五人の漁夫と「一緒に陸」に上がったときに、「若い漁夫」が「コッソリ日本文字で印刷した『赤化宣伝』のパンフレットやビラを沢山」持つて帰つた。「日本人」がそのような活動をおこなっていることに驚きを感じ、漁夫たちは「飛んでもないものだ、と云いながら、その『赤化運動』に好奇心を持ち出し」たという。

『函館市史』を調べれば、実際に一九三二年にカムチャツカ西海岸プーチ島で日本人労働者が労働争議を起こしていたことが分かる。当時ソ連の蟹工船にも多数の日本人労働者が雇用され、「カムチャツカ両岸に多数の漁場をもつ国営アコ会社」が「一七六二名」、「西カムチャツカ沿岸に漁場が集中しているリュール商会」が「一、四四九名」の日本人漁夫を雇っていた。また一九二八年に初めて出漁したソ連の蟹工船には「五一七名」の日本人漁夫が乗船していたとされる(3)。

国営企業の労働者は、昭和四年まで、ほぼ半数は日本人労働者で占められていた。だが昭和五年には、ロシア人が大幅に増加したことによって日本人労働者の地位は相対的に低下し、その後は急速に削減され、四年後の昭和八年には、漁業労働者は完全にロシア人労働者に切り替えられたのである。

日本人漁夫の雇用中止の理由として、前年カムチャツカ西海岸プーチ島で発生した日本人労働者の争議行為、ソ連側の赤化宣伝を警戒する日本側取締当局の処置、日本人漁夫の蟹工船出漁直前の雇用契約破棄などから生じた日本人漁夫に対する不信感があげられていた(4)。

「日本人労働者の雇用中止」(『函館市史』)

『函館市史』には「日本人漁夫の雇用中止の理由」として(二)

「カムチャツカ西海岸プーチ島で発生した日本人労働者の争議行為」、(二)「ソ連側の赤化宣伝を警戒する日本側取締当局の処置」、(三)「日本人漁夫の蟹工船出漁直前の雇用契約破棄」などから生じた「日本人漁夫に対する不信感があげられている」。

「日本側取締当局」が「ソ連側の赤化宣伝」を警戒していることは「蟹工船」にも描かれているのだが、争議行為を起こしたり、出漁直前に雇用契約を破棄したりするなどの階級意識に目覚めた日本人労働者がソ連側の蟹工船に乗り込んでいたことが分かる。

三

「蟹工船」(四)には、行方不明になった川崎船が三日目に博光丸に帰還したエピソードが記されている。「大暴風雨」のために操縦できなくなつて「カムサツカの岸」に打ち上げられ、近所のロシア人に救われたのだった。ちょうど母船に帰る予定の日、乗組員がストープの周りで身支度をしながら話していると、ロシア人が四、五人、さらに通訳の中国人一人を交えて部屋に入つてきた。彼らは「働く人」「貧乏人」が「働かない人」「金持」に支配されている社会でも、「プロレタリア」が団結して闘争すればかならず不平等を改革できることを説いた。この話を聴いていた漁夫たちは、つぎのような反応を示した。

彼等は漠然と、これが「恐ろしい」「赤化」というものでは

ないだろうか、と考へた。が、それが「赤化」なら、馬鹿に「当り前」のことであるような気が一方していた。然し何よりグイ、グイと引きつけられて行つた。

(三)

このように漁夫たちがロシア人による説明を「当り前」のこのように思い「グイ、グイと引きつけられて行つた」のに対して、船頭は彼らとはまったく異なる態度を示した。それが典型的に見られるのは、つぎの場面である。

「分る！」知らないうちに興奮していた若い漁夫が、いきなり支那人の手を握つた。「やるよ、キットやるよ！」

船頭は、これが「赤化」だと思つていた。馬鹿に恐ろしいことをやらせるものだ。これで——この手で、露西亞が日本をマンマと騙すんだ、と思つた。

(三)

「若い漁夫」がロシア人の話に共感し、通訳の中国人の手を握るのに対して、船頭はあくまでも「赤化」を警戒し、「この手で、露西亞が日本をマンマと騙すんだ」と感じてゐる。さらに母船に帰還した後、ロシア人から聴いた「プロレタリア」の話を仲間に紹介する場面でも、船頭は警戒を決して解かない。

皆は「糞壺」の入口に時々眼をやり、その話をもつともつとうながした。彼等は、それから見てきたロシア人のことを色々話した。そのどれもが、吸取紙に吸われるように、皆の心に入りこんだ。

「おい、もう止せよ。」

船頭は、皆が変にムキにその話に引き入れられているのを見て、一生懸命しゃべっている若い漁夫の肩を突いた。

(三)

浅川監督や雑夫長が来ないかと「糞壺」の入口に眼をやりながら、「皆」は「その話をもつともつとうながした」。「ロシア人のこと」が「吸取紙に吸われる」ように「皆の心」に入り込み、「変にムキにその話に引き入れられている」のに気づいた船頭は、「若い漁夫」の肩を突いて話を制止する。だが次第に彼らの間に「何んだか、理窟は分らねども、殺されたくねえで」と疑念と反発が強まってくる。

「漁に出る振りして、カムサツカの陸さ逃げて露助と一緒に赤化宣伝ばやつているものもいるツてな。」

「……………」

「日本帝国のためか、——又、いゝ名義を考へたもんだ。」
——学生は胸のボタンを外して、階段のように一つ一つ窪みの出来ている胸を出して、あくびをしながら、ゴシ／＼搔

いた。垢が乾いて、薄い雲母のように剥けてきた。

「んよ、か、会社の金持ばかり、ふ、ふんだくるくせに。」

(中略)

「それ、本当かも知れないな。」

然し、船頭が、ゴム底タビの赤毛布の裏を出して、スト
ーヴにかざしながら、「おい／＼叛逆てんぱいなんかしないでけれ
よ。」と云った。

「……………」

「勝手だべよ。糞。」吃りが唇を蜡のように突き出した。

ゴムの焼けかゝっているイヤな臭いがした。

「おい、親爺、ゴム！」

「ん、あ、こげた！」

(四)

右の場面は、積船から逃亡した漁夫が「露助と一緒に赤化運
動」をしていることに共感を抱いた「吃りの漁夫」と、「日本帝
国のために」という「名義」が偽物であることを看破した「学
生」との会話である。途中省略したのは、二人の話を聴いてい
た「中年を過ぎた漁夫」の吐いた唾がストープのうえで蒸発す
る描写で、それは蟹工船で労働者たちが骨身を削り上げた利
益を「会社の金持ばかり」が「ふんだくる」ことが唾棄すべき
ことであるとして比喩的に描いている。このように船内で労働

が搾取されていることの真相が次第に明らかになる場面では、
引用された部分を含めると合計四回、二人の会話の合間に「……
……………」の記号が使われている。これらは労働者たちが
息を凝らして話のなりゆきに耳を傾けながらも、まだ自己の態
度を明確にするまでには至っていないことを表現している。し
かし彼らに同調する気配があることを察知した船頭が会話のな
かに「おい／＼叛逆てんぱいなんかしないでくれよ」と割り込んでくる。

漁夫や雑夫たちと「糞壺」で起居をともにする労働者仲間であ
り、「親爺」と親しく呼びかけられる間柄でありながら、船頭は
彼らに警告を発している。

ここで多喜二は「てむかい」というルビの振られた「叛逆」
という言葉を使って、彼らの不満が散発的な「てむかい」によ
って解消されるものなのか、あるいは組織化された運動にまで
発展してゆくのか、この小説の行方を暗示している。この場面
ではまだ沈黙している労働者たちに、不当な支配に屈しない労
働者としての階級的自覚を持たせるのは、すでに紹介したよう
に船頭に対する「威張んな、この野郎」という言葉であり、「殺
されたくないものは来れ」という「学生上りの得意の宣伝語」
であった。聴衆を浮き足立たせる流言から、説得力をもって支
持を集めるスローガンへと言葉の性質が転換することによって
多数を動員できる力がうまれ、それまで分断されていた労働者
同士が連帯しはじめるのに応じて、「てむかい」から「叛逆」、

そして労働者としての正当な権利を要求する争議へと抗議活動が発展していったのである。この後の場面で「芝浦の工場」にいたことのある漁夫が「芝浦の工場」と比較して蟹工船の労働環境の劣悪さを強調しながらストライキの経験話を話しはじめる。

「飛んでもねえ所さ、然し来たもんだな、俺も……。」その漁夫は芝浦の工場にいたことがあった。その話がそれから出た。それは北海道の労働者達には「工場」だとは想像もつかない「立派な処」に思われた。「この百に一つ位のことがあったって、あつちじゃストライキだよ。」と云った。

この漁夫は「芝浦」と呼ばれ、ストライキが起ると「吃り」や「学生」「威張んな」とともに職場代表となって争議団の先頭に立つ。労働運動史を調べると、芝浦製作所争議は一九二五年七月一〇日に、アナキズム系の企業別組合芝浦労働組合が組合活動家の誠首をきっかけにして、ほぼ全従業員が参加するストライキをおこなった。組合幹部が従業員大会の反対を押しきって不利な条件でストを終結させたために、アナキズム系幹部の影響力が弱まって日本労働組合評議会の影響が強まり、企業別組合から横断組合へ脱皮する動きが強まったとされる(5)。「芝浦」という呼称の背景には、実際に発生した芝浦製作所争議が存在し、「芝浦」の漁夫は誠首された組合活動家がモデルであったと考えられる。

四

「蟹工船」ではこの後、漁夫や雑夫に加えて水夫や火夫、船員までもストライキに加わって、「三百人」が「要求条項」と「誓約書」を持って船長室に出かけた。ここで大多数の労働者が参加したといえるのだが、その振る舞いに注目してきた船頭がどちらの側についていたのかは明らかにされていない。「兎が飛ぶ」と譬えられるような三角波が立ちはじめ「大暴風」になることを予測した漁夫たちが川崎船への乗り組みを拒否したことがストライキの発端となった。ストライキは「危ねえ、今日休みだべ」という漁夫の発言から「二時間程してからだった」とされ、その間に船頭と漁夫の小競り合いがあったのかもしれない。高橋博史氏によれば、そこでは「競争に負けまいと自然が課する条件を無視して出漁せよと命ずる監督と、自然に向き合い、労働してきた者達の知恵とが綱引き」を演じ、「勝ち負けの論理に替わって、労働する者達の中に蓄積されてきた経験知が、監督の支配に立ち向かう」という(6)。監督から川崎船を任された船頭は、監督からの命令と自己の「経験知」との間で葛藤を強いられたにちがいない。船頭は漁夫たちから「親爺」と呼ばれる親しい間柄であると同時に彼らが最初に立ち向かう相手であった、三分の二だけ「仕方なしに」漁夫の味方」をし「後の三分の二」は監督の「小さい『出店』」になるといふ曖昧な態度を示していた。だが結果として川崎船はウィンチにつり下げられた

まま放置され、「雪だるま」のようにストライキに参加する人びとの集団が大きくなっていった。ここでは船頭の声が記録されない反面、「……………」と沈黙していた労働者の大多数をストライキに動員することに成功したのである。「叛逆」を警戒していた船頭もこのときには彼らを制止する言葉を何も発していないことから、積極的に賛成はしなかったもののストライキを黙認していたのだと思われる。このようにストライキによって支配する者と支配される者との立場が入れ替わる可能性を説いたが、島村輝氏によれば多喜二は「糞壺」で生きる労働者の姿を描くことを通じて「帝国主義敵資本主義体制とその向こう側に見通される天皇制はもつとも汚穢に満ち満ちたものとして、そして『臭い』『きたない』とおとしめられた労働者の反抗は、かえってかげがえのない人間らしさ・『人権』を取り戻すための尊い聖性を帯びたもの」描き出すことに成功したという(7)。

「蟹工船」のテーマは労働者が連帯することによって社会を変革できる可能性を示唆したことにあり、多喜二はこのテーマをさらに発展させて「不在地主」(中央公論、一九二九年一月)や「沼尻村」(改造、一九三二年四、五月)などの作品では労働組合と農民組合との連帯をうながし、労働者と小作人からなる無産者階級の勢力の結集をはかった。これは労農連携によって封建的専制勢力を打破しブルジョア民主主義革命を達成する「二七年テーゼ」に即したテーマであったといえる。「蟹工船」が掲載された「戦旗」一九二九年六月号には「一九二九年

のメーデー——ダラ幹を蹴飛ばして労働者農民は進む——という記事が掲載され、投稿記事の他にも「戦旗社及各支局」による「調査」にもとづいて川崎や横浜、静岡、豊橋、名古屋、三重県松阪、京都、大阪、神戸、福山、広島、福岡、埼玉(掲載順)などの「各地のメーデー」の様子が報告されている。多喜二は江口渙や中野重治、片岡鉄平、貴司山治、大宅壮一たちとともに「戦旗」防衛関西巡回講演会で一九三〇年五月二日に訪れることになる松阪では、どのようなメーデーがおこなわれていたのかを「戦旗」の記事から引用する。

青竹の旗竿にまつ×な組合旗をつけた全農の同志をはじめ、水平社、無産婦人同盟の元気な顔が、愛宕山竜泉寺境内に続々と詰めかけた。行列は至る所でかけ足をはじめやうとして警官の垣と衝突しながら、松阪木綿第一第三工場前から、平生町、港町、日野町、商業学校前通りを五曲橋に至り、本町中町を経て魚町に入り、それより公園に至って散会した。

全農や、水平社の同志は今日までのメーデー歌はつまらねえ、ダラ幹の歌ふものだとばかり、×旗の歌や、三、一五の歌などをどなったり素晴しく氣勢をあげた。

このメーデーの直前には四・一六事件が発生し、全国農民組合(全農)三重県連合会の指導者であった上田音市、丸島浅次

郎、長谷川多三郎、松田松太郎の四名が治安維持法違反の容疑者とされ、組織には大きな打撃が与えられたばかりであった。デモ行進の隊列がその前を通過した松阪木綿工場では、三重県内最初の労働組合であった三重合同労働組合に指導された争議団が一九二六年三月二六、二八日の三日間のストライキをおこない、賃上げや賄いの改善などの要求を貫徹させていた。争議団はストライキの勝利を「日本最大の日本労働組合評議会所属の三重合同労働組合の絶対なる威力と、農民組合、水平社、無産社同盟其の他の無産階級団体からの異常なる応援の結果」(8)であったとして考えられていた。三重合同労働組は日本労働総同盟から分かれた左派の日本労働組合評議会に属し、その結成に際しては北村大三郎や山田清之助が本部を訪れて連絡をつけて三田村四郎がオルガナイザーとして来県した。北村や山田は同時に全農三重県連と全国水平社(全水)三重県連の指導者でもあり、松阪には労働者と小作人、水平社同人が連帯する「三角同盟」の拠点が形成されていた。当時は非合法とされた日本共産党を支持する「三角同盟」のグループが中心となって多喜二たち「戦旗」の作家たちを迎えた。一九三〇年一月に松阪借家人同盟の幹部石垣国一は連絡担当になって雑誌を戦旗本社から直送してもらい、五月の講演会の後に戦旗松阪支局を設置して配布網を拡大した。「治安維持法違反被疑事件送局ノ件」(一九三一年九月一日)によれば「昭和五年五月プロ講演会後山口恒郎ト謀リ松阪支局ヲ設置シ昭和五年六、七月以降本年(11

一九三一年)五月迄ノ間毎月三十部乃至八十数部ノ配布ヲ受ケ、之ヲ藤村伊三松ト共同シテ全部配布シ」たという(9)。一八九四年七月二五日に員弁郡に生まれ鋸目立職兼金物商を営んでいた石垣は、戦後日本共産党所属の松阪市議を務めて地域の発展に尽力する。「三重近代文学研究序説」『戦旗』防衛巡回講演会をめぐって」を執筆した岡村洋子氏によれば、石垣は当時「無産者新聞」や「無産青年」「救援新聞」などを配布しながら「とりわけ『戦旗』を読むことを通じて、マルクス主義の理解に努め、自分が実際に関与している運動の基本原理を学び取っていた」という(10)。

石垣はまた一九三〇年八月中旬には全水三重県連の上田音市や山口恒郎たちと協力して名古屋新美術座のプロレタリア演劇を松阪座で上演し、翌年には水平社同人を中心とする松阪労働劇団を組織しようとして、名古屋市前進座や東京新築地劇団を迎えて松阪巴座で公演を開こうとしたものの治安当局による度重なる干渉によつて実現には至らなかつた。しかしいずれも芸術活動を通じて階級意識の高揚を目指したプロレタリア文化運動の一端を担うものであった(11)。

『戦旗』防衛関西巡回講演会が松阪でどのように開かれたのかは、右の「治安維持法違反被疑事件送局ノ件」に添付されている事件報告書に記述されている(12)。この報告書は一九三一年五月二一日に三重県内で日本共産党員関係者の一斉検挙がおこなわれて一五〇余名が検挙、送検一六名のうち治安維持法

違反の容疑で四名が起訴されて安濃津地方裁判所で公判に付された事件に関するものである。被告の一人山口恒郎は一九〇七年一〇月二八日に松阪市内の被差別部落で生まれた。私立励精中学を四年で中退した後、東京毎日新聞社の内勤事務に就くが一九二八年八月に病気で退職し、同年一〇月から大阪全水本部常任書記兼宣伝部長となる。四・一六事件で検挙起訴され、治安維持法違反によつて懲役二年（執行猶予五年）の判決を受けた。報告書によれば、山口は一九三〇年五月四日に松阪に帰つてからも「積極的ニ極左運動ヲ為シ」、全水三重県連常任書記に就き「勇敢ニ活動ヲ持続シテ」いたという。大阪で全水本部の宣伝部長をしていたことを活用して「戦旗」の作家たちを松阪に迎えたと思われる。

昭和五年五月二十日頃上田音市外二名ト共ニプロレタリア
文芸講演会準備会ヲ持チ、文芸ニ依リ大衆ノ階級意識ヲ昂
揚セシムヘク計リ同月二十三、四日頃松阪町公会堂ニ於テ
貴司山治ノ一行ヲ聘シテ講演会ヲ為シ、其ノ終了后前田屋
ニ於テ有志約四十名集合シテ座談会ヲ持チ

右の記述では講演会の開催されたのが二三、二四日とされており若干日付が食い違っていることや、臨席の警官が「弁士中止」を連発し講演会が解散させられるのを事前に予想していた松阪の若者たちが葉売りや露天商が使う商人宿の前田屋旅館の

二階を借り切つて座談会を企画したことなどは岡村洋子氏がすでに明らかにしている。さらに岡村氏によれば、座談会で多喜二と握手をしてもらつた島岡こてるは、彼の「柔らかな物腰と知的な雰囲気」が忘れられず、築地警察署内で拷問によつて虐殺されたことを知ると「単純な怒りではなく、頭に血が上つた」という。前田屋旅館は（三角同盟）の拠点となつていた旧町名「日野町二丁目」という被差別部落のなかにあり、細かく入り組んだ路地は三重県警の特高課刑事による尾行をまくのに有効であつただろう。別珍鼻緒製造職で当時一九歳の島岡こてるも同じ地域の出身者であり、女性活動家としてピラの配布などをおこなつていた。無産者階級の解放という目標を同じくする労働組合や農民組合の運動員でさえ水平社同人に対する差別は隠さなかつた時代、不当な差別に苦しめられた彼女に向かつて多喜二は快く手を差し出したにちがいない。

多喜二を迎えた松阪の活動家の胸には、講演会の前々年に当たる一九二八年一月一三日に津警察署内で怪死した大沢茂の姿が浮かんだと思われる。昭和天皇即位御大典に合わせて一月二一日に昭和天皇が伊勢神宮に来る際、県内の活動家は治安維持のために予備検束を受けた。そのとき全農三重県連合会書記であつた大沢茂は県内の警察署の留置場を転々とさせられ、食事も水も与えられないまま最後は獄死した。松阪では二二歳の若さで殺された大沢の死を悼んで一月一五日に無産団体葬がおこなわれ、約三、〇〇〇名の労働者と農民が赤旗を押し立

てて葬儀をまもつた(『労働農民新聞』第六九号、一九二八年一月一九日)。彼らは大沢を喪つた悲しみと怒りを「大衆行動によつて飽迄復讐せん」という決意を固め、翌年の命日には「大沢茂記念日」と称するデモをおこなつた。人望が厚く教養も豊かであつた大沢の死を悲しんだ松阪の活動家たちは、若い多喜二のなかにも大沢と共通する「柔らかい物腰と知的な雰囲氣」を感じ取つたと思われ、多喜二が虐殺されたときに島岡が「單純な怒りではなく『頭に血が上つた』というのは、大沢が殺されたときの怒りをよみがえらせたからにちがいない。

講演会の会場となつた松阪町公会堂は、松阪が発祥地である三井家が松阪町に寄贈したもので、一九二四年九月二〇日に「三井家資料展覧会」の開催をもつて開館した。同地にはもともと三井家別邸があり、三井家の番頭一家が暮らしていた。米騒動の翌年の一九一九年に白壁が完成したが、その三分の二に当たる部分を取り壊して松阪町公会堂が建てられた(13)。三重県内でも津は米騒動に際して六〇〇〜七〇〇名が参加し九〇名が起訴されるに及んだのに比べて、松阪は米騒動が発生していない。昭和に入つて社会運動が激化するの意外に思われるが、三重県社会運動史の研究者黒川みどり氏によれば、これは「村当局の迅速な対応や有力者の慰撫など」に加えて「多くの部落が副業としている伊勢表が好況であつたことが、相対的に生活にゆとりをもたらしていた」ためであつたという(14)。三井家による救恤事業の一つとして松阪町に寄贈された公会堂で戦旗防衛

関西巡回講演会は開かれた。松阪町公会堂から前田屋旅館まで直線距離で約八〇〇メートル、徒歩約一五分の距離を移動して座談会が開かれたのであつた。

藤田廣登氏によれば、多喜二たちは松阪での講演会当日、大阪から来た連絡員によつて「東京で大檢舉がはじまっているらしい」という情報もたらされた。実際に五月二〇日、東京日比谷署員によつて有楽町石川ビルの戦旗社の勤務員全員が検束され、その弾圧は出入りの店員や小僧一〇〇名にも及ぶ徹底したものであつたという(15)。暗澹たる気持ちに襲われながらも、無産者階級の広範な連帯を呼びかけていた多喜二の眼には、「三角同盟」は理想的なものとして映つたにちがひなく、座談会に集まつた若い活動家たちの姿は暗闇を照らす一点の燈火のように感じられたことであろう。

註

小林多喜二の作品の本文は新日本出版社『小林多喜二全集』に拠つた。

(1) 「解題」『定本小林多喜二全集』第四卷(一九六八年二月、新日本出版社、二二六頁)

(2) 『函館市史』通説編第三卷第五編『大函館』その光と影(一九九七年三月、四七四〜四七九頁)

(3) 同右書、九二〜九五頁

(4) 同右書、五九四〜五九六頁

(5) 「大原クロニカ」(法政大学大原社会問題研究所編『新版社会・労働

運動大年表』(労働旬報社)

(6) 高橋博史『蟹工船』論―封じられた光景―(『国語と国文学』第一〇三三号、二〇〇九年二月、一二頁)

(7) 島村輝『蟹工船』を解体するキーワード―映画・暴力・汚穢と聖性―(『三〇分で読める…大学生のためのマンガ蟹工船』、二〇〇六年一月七日、一七八頁)

(8) ビラ『松阪木綿垣鼻工場争議報告』(『三重県部落史料集(近代篇)』、一九七四年二月、三重県厚生会、二八四～二八五頁)

(9) 「治安維持法違反被疑者事件検挙着手二閱スル件」(同右書、四六〇頁)

(10) 岡村洋子「三重近代文学研究序説―『戦旗』防衛巡回講演会をめぐって」(『三重大学日本語学日本文学』第一号、二〇〇〇年六月、七一頁)

(11) 同右および(司法省刑事局『思想研究資料』第二九号、一九三二年九月、六五頁)

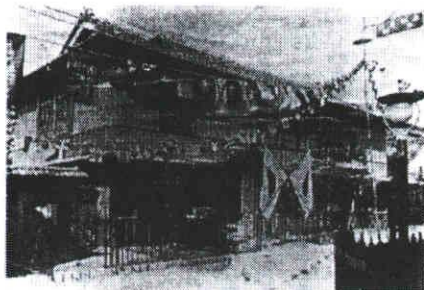
(12) 前掲(9)と同じ。

(13) 「思い出の一枚」第四二二号(『夕刊三重』、一九九三年三月九日)

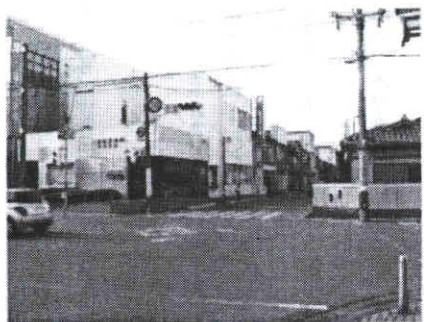
(14) 黒川みどり『地域史のなかの部落問題 近代三重の場合』(二〇〇三年三月、解放出版社、九九～一〇一頁)

(15) 藤田廣登『小林多喜二とその盟友たち』(二〇〇七年二月、学習の友社、一〇〇頁)

「おにし・やすみつ 本学教員」



松阪町公会堂



松阪町公会堂のあった場所
(松阪市本町)



前田屋旅館のあった場所(松阪市京町)